景観まちづくりの課題と展開

東京大学教授
西村 幸夫 中島 直人

風景認識の5段階論

景観法に基づく日本初の景観計画を策定し、さらには市内の水の風景を日本初の重要文化財景観として選定へ至った長野県近江八幡市の名物市長であった川端五兵衛氏（16年4年 inlet 死去）から先日お話しをいただいて、元々人々が景観の問題を意識していこうという5段階があるとのことである。

最初はまったく無関心の段階。それが風がなぜか特別なものであると感じる人はほんのわずかな数であり、その他は風景が生活をするための自然景観であり、これらを用意していると考えてきました。これにより、日常の観光生活を支えるものであると考える。

次の段階で、「おっしゃる通り」という風景の認識が進むことになる。これにより、二段階目である「風景体験」の段階である。

続いて、近所のちょっとした良い風景などでテレビで紹介されるなど、「おっしゃる通り」という段階が進む。これにより、自然体験の段階である。

最後に、彼女たちの多大な風景が見直され、マスメディアで紹介されることによって、「おっしゃる通り」という段階が進む。これにより、自然体験の段階である。

以上のように、景観の認識は風景が私たちの生活を支える存在であり、その重要性が認識されることが必要である。
この『谷間』の神殿がある。
どのようにしてそのような不可視的な価値の顕在化が可能なのか。

■第一の手法：景観のそぞろらが別て特別なものを見つ出す

ひとつの手法は、まちの景観的な魅力はたんとに不可視なので、気付けていないという条件下で評価を検討する必要にあれば（に仮に断片的なものである）価値のある景観が見出されやすい場合を含むので、そのような景観上のそぞろらはお楽しみということである。

透過性が大きい街並みや山の斜面にかたり自然の変化に敏感な視点を発揮する、それらを総合的に見ることで景観上の探求が深まっていくことになる。

それでも景観上の顕在化は十分な場合や点在していくネットワークを必要とするような場は少ない。

そのときはどうするか。

■第二の手法：都市の構造から景観上への重視を図出す

次なる手法は現在の都市の構造から景観上重要となるところを掘り下げていくという作業である。

たとえば、通路の案内がきわだる。

学校や中学校の指定されたスクールゾーンなどが子供たちが通学や通勤をする際に重要な役割を果たしている。ここでの風景が子供たちにとってはふるさとのおうちの前であるとその価値を引き立てる役割を持っている。

行道は友達とふれ合って遊んだ道だれや広場の意味は将来をつながることと子供たちの心の中に積み重ねていくことになる。現在では人を見立てる強い道であったとしても力をつけての歩みや今後の重要性を持っている。

このようにして各空間をより深く見ることで景観上の価値を引き立てることが重要である。都市の構造そのものに価値があると同時に、その価値を引き立てる場所を見つけることが重要である。都市景観に占める景観上の価値を高めることが重要である。
しかし、そのような理想的な市民参加プロセスなど存在するのだろうか。
ふたつの相異だった工夫が存在するように考える。

■第一の工夫：草の風景ワークショップによる
第一の工夫は、文字通り草の風景ワークショップによって、「つつのまち」の公園のない新しい指導を模索した結果である。新緑の季節に見渡してみると、新しい風景が創出されている。そこでこれらの工夫を、ワークショップを用いた企画者の実践や予想を超えて、あるかに豊かに結実した結果をもたらすに違いない。

なぜなら、多くの地域における風景は、より多くの社会的文脈からも見逃されないかが大切である。多くの目的は多くの異なる視点や思想を意味している。

ひろびろと異なった人間であるように、ひろびろでの視点は異なる風景に反響し、それが積み重なって、それによって生まれた新しい風景が創造される。その結果を市民の前で示す風景の発見を促すという工夫である。私たちの研究室は、現在、新宿区の風景計画研究の作業に参加しているが、そのテーマの一つは、合宿成形の場への手がかりの提供を目的としている。ここでひとつ、具体的な分析事例を示そう。

次章の写真を見るとわかるように、二枚の写真が示すように、草の風景ワークショップが示す新しい視点は、より豊かに結実されることが示唆されている。予想外の発見は、参加者の参加活動を高め、新たな発見を見つけることを可能にするものである。

その分、今今県には草の風景ワークショップの全国的な展開がどのように可能かとの方向性実験を行える風土を築いてきたということができる。

■第二の工夫：専門家による詳細な分析による
この草の風景ワークショップは含意性に至る民主的な工夫であると住まう、このように新しい視点をもつ知識を持つ工夫として敬意を表していることができる。

しかし、こうした工夫はもはや、浮かび上がった視点が多様であるならば、以前のフォーラムが追い払うことができる可能性は高い。

また、ワークショップ時に一層の発想を後日に行う関係を手がかりの一つの指導を示すことは、ワークショップの枠外のことになるかもしれない。さらに、現状において都市開発に手がかりのないものの関係で、自然ながら指摘できる可能性が高まっているという点がある。

こうした方向性を持つために別のアプローチによって「つつのまち」を普通でなく意識することを可能とする方法が検討されている。それは専門家による新たな景観分析を出発点として、合意形成の場に手がかりの提供をするという工夫である。

例えば、北区で挙げた第三の手法である都市空間における「ふつうのまち」を普通でなく意識することを可能とするものである。私たちの研究室は、現在、新宿区の風景計画研究の作業に参加しているが、そのテーマの一つは、合意形成の場への手がかりの提供を目的としている。ここでひとつ、具体的な分析事例を示そう。

次章の写真を見るとわかるように、二枚の写真が示すように、草の風景ワークショップが示す新しい視点は、より豊かに結実されることが示唆されている。予想外の発見は、参加者の参加活動を高め、新たな発見を見つけることを可能にするものである。

その分、今今県には草の風景ワークショップの全国的な展開がどのように可能かとの方向性実験を行える風土を築いてきたということができる。
「景色はみんなのもの」という視点とまちづくり

川端五郎先生は『江戸における景観の構築』の中で述べている。「景色はみんなのもの」という考え方は、都市景観の形成において重要な役割を果たしている。

今日では、公共の景観の保全のために行政が補助金を支出することが普通の事態になっている。歴史的町並みの保全がなされているということは、地域の住民にとって重要である。

しかし、そうした認識もまた乏しいわけではない。町並み保存運動の盛り上がりにおいては、町並みの公共性という観点が注目されている。これが町並みはみんなのものというスローガンにふさわしい。

この景色はみんなのもの」という視点を理解し、公共性の発信をはかることが、地域の発展に重要である。
通に守るルールが必要となる。ローカル・ルールの発
生である。
景観法はそのことを法律の言葉で表現している。つ
まり、「良好な景観」は、国民共通の資産として、現在
及び将来の国民がその恵みを享受できるよう、その整
備及び保全が図られなければならない。」（景観法第2条
第1項）
2004年の景観法の制定によって初めて私たちは景観
まちづくりの思想を支える法的根拠を得たのである。
遅すぎたろうか。「町並みはみんなのもの」とい
うスローガンから29年経過しているからには、たしかに
そうだろう。しかし、取り返しがつかないほど遅すぎ
ということはないはずである。遅すぎるから景観法な
どはや役立たないなどという声は聞かれない。
「風景はわたしたちのもの」という視点と景観利益
川端五郎衛門前長の筆述は、景観の公共性にとどま
らず、その根底に「この景色はわたしたちのもの」という主
張が顕在化する着想を見たことにあたる。
景色がみんなのものである段階では、「みんなのもの」
であることが同時に「だれものでもないもの」に変わっ
てしまうという意味合いがある。それを守るためのローカ
ル・ルールができあがって、それはレールのためのル
ール、すなわちルールを守るだけのためのルールにな
らべえない。
それが風景は「わたしたちのもの」という言葉から、既に改
相が異なる。景色を守らないものによって私が被
害を受けることである。景観はそれが一定の制度のも
とに守られることによって良い状態を保っている
とすると、それは守るべき景観利益というべきもの
が発生しているのだということを示唆している点にこの
主張の意味がある。
景観利益という法律用語が一般的の注目を集めるよう
になったのは、2000年12月18日に東京都議会によって判
決が下された、国立公園法事件の民事訴訟の1審か
らである。
控訴審を経て、同判決の上告審が終結したのは2006
年3月30日である。判決の中に景観利益については
次のように述べられている。
「都市の景観は、良好な景観として、人々の歴史的地
区は文化的環境を形成し、豊かな生活環境を構成する場
合には、市民の利益を有するものというべきである。
（市町村）景観法は、良好な景観が有する価値を保護
することを目的としたものである。そうすると、良好な
景観は都市内の地域住民が、その住む地を生活的に
享受する利益（以下「景観利益」とは、法律上保
護に値するものと解釈するのが相当である。）」（2006.3.30
最終裁決）
こうして法によって保護すべき景観利益が存在する
ことが最高裁によって認知されたのである。しかしながら、同
時に、最高裁は景観利益が認められる場合として、次の
ように述べている。
「景観利益は、これが侵害された場合には被侵害者
の生活防衛や健康防衛を生じさせるという性質のもの
ではないこと、景観法の保護は、工業地に住む住民を対象
としているため、景観法の対象は、景観法の不動産
者や防衛者との間で意見の対立が生じることを想定
されるのであるから、景観利益の保護とこれに伴う財
政権の制限は、第一次的には、民主的手続きによる
定められた行政法上や景観法上の条項等によって生
まれることが予定されているものであるということができる
などからすれば、ある行為が景観利益に対する法的な
侵害を及ぼすというためには、少なくとも、それの侵害
行為が罰則化や行政法上の規制に違反するものであ
り、公序良俗違反や権利の侵害に該当するもので
あるなど、侵害行為の様相や程度の面において社会的
に容認された行為としての可能性を欠くことが求められ
ると解釈するのが相当である。（同上）
すなわち、ある法律的なルールが敷かれている
ことが前提条件とされている。それについてハーディは高
いといわざるを得ない。しかし、それ数年前までは、景
観規定の法的な妥当性に関しては論戦があった
という状況を振り返ると、これもかなりの道のりを私
たちは来ているということを実感させられる。
ここでのS段論法に基づいて、「景色はみんなのもの」
であるから「景色はわたしたちのもの」であるという論
理だともいえよう。
「風景はわたしたちのもの」というコンセプト
景観認識の最終段階は、川端五郎衛門前長前市長
によると、従者への寛容な段階であるということになる
が、これを広く解釈すると、「風景はわたしたちのもの」
という共同の場、すなわちコンセンサスこそがここに見出
る段階だといえるだろう。
「風景はみんなのもの」という表現と「風景はわたした
ちのもの」という表現とはよく似ている。しかし微妙
に異なる部分がある。それはどこか。
「みんなのもの」というのは共通性の表現であるが、
得てして「誰ものでもないもの」になりかねない、集
団無責任体制になりかねないのである。これに対して、
「わたしたちのもの」は違いある。共通の構成員の姿
がはっきりと映し出されているのだ。こうしたコンセプト
の発端を身の回りの風景に対して有することができる
かどうか、問題はその点に尽きる。そしてこのこと
こそ、「まちづくり」の核となるのである。
「まちづくり」とは、たんに都市計画をソフトに表現し
たもののではない。たしかにそのように表現して都
市計画を身近にしようという行政権の意図が見え隠れ